

過ぎた春の記憶

小川未明

青空文庫

正しょういち一いちは、かくれんぼうが好きであつた。古くなつて家を取り払われた、大きな屋敷跡で村の子供等らと多おおぜい勢せいでよくかくれんぼうをして遊んだ。

晩ばん方がたになると、虻あぶが、木の繁みに飛んでるのが見えた。大きな石がいくつも、足あしもと許もとに転がっている。其そこ処こで、五六人のものが輪を造つて、りやんけんぽと口々に言つて、石と鋏はさみと紙とで、拳けんをして負けたものが鬼となつた。

鬼は、手てぬぐい拭ぬぐで堅く両りょうがん眼がんを閉められて、その石の間に立た

された。而して他のものは、足音を立てずに何処へか隠れてしまつた。

「もういいか。」

と、鬼になつたものが言うと、何処かでクスクスと、隠れた者の笑い声が聞えて、

「もういいぞ。」

と答えるものがあつた。すると、鬼になつたものは自分で、手うしろ後方にやつて縛つてやつた手拭をはずした。而して、しばらく其処に立つて、何処へ隠れたかということを考えて、その方へ行つた。

隠れているものは、みんな、鬼の来るのを怖れて見つかりはせ

ぬかと、竦すくんでいた。鬼は眼をきよろきよろさせて、熊笹の繁つた中や、土手の蔭などを一つ一つ探たずねて歩いた。而して、頭が、ちよつと出ていたり、着物の端はしなどがちよつと見えると、鬼は、安心してしまつて、わぎと気の付かないような風をして、

「何処へ行つたろう……何処に隠れているだろう、ここでもない」。

などと口で言つて、わぎと彼方あちらへ行くような振りをして見せて、横目でちよつと此方こちらの様子を睨んで見る。

此方の、見付けられたと思つたものは、やつと心のうちで、これはいいあんばいに、助かつたと思つて、まだ胸をどきどきとして息の音を殺している。

すると、彼方へ行きかけた鬼は、また此方へうかうかややつて来て、直ぐ、その頭の見えている者の間近に来て止とまつた。

見つけられたと思つたものは、急に頭から冷水をかけられたよ
うな気分がして、穴があつたら地の中へ隠れたいと思つた。
刹那、

「見つかつた！」

と鬼は叫んで、直すぐさま様、その者を捕えてしまつた！

二

正一は、この子供等の中でも、どちらかといえは臆病な子供であつた。而して鬼になるより、隠れる方が好きであつた。

彼は、見つかった！ と頭の上で言われる時には、身がぶるぶると戦ふるえるように、ぞつとすることを覚えた。藪の中に隠れている時、鬼が此方に歩いて来る足音がガサガサと聞えると、もう身の毛がよだつて、耳が熱ほてつて、心臓がどきどきした。而して、或時は、自分から、居いた堪たまらなくなつて、やあ——と死に物狂いに叫んで藪の中から飛び出ることもあつた。

ある秋の晩方であつた。白い夕ゆう靄もやがうすくぼんやりと降りて、彼方かなたの黒ずんだ杉林に、紅く夕日が落ちた時分であつた。村の子供等は、いつものように古い屋敷跡に集つた。この屋敷は、村の端はずれにあつて、昔は、五百石取りの武さむらい士が住んでいたところであつたが、いろいろと仔細があつて衰微してしまつて、その家は、

古びて遂にこの程、取り壊されたので、その屋敷跡には、古い空^{から}井戸があつた。また地形石^{ちぎよういし}などがその儘^{まま}となつていたり、家根^{やね}石などが転つていたりした。裏手には杉の木の林があつて、土手には熊笹が繁つていた。

子供等は、紅い沈んだ夕日を眺めていたが、

「おい、君等の中で幽霊を見たものはないかい。」
と一人がいった。

すると、一人は、「見たよ。」といった。

「何処で。」

「あの杉の木の中で。」

とその少年は、後方の紅い夕日の沈んだ森^{ゆびさ}を指した。

「どんなものであつたか。」

と、一人が言った。

「黒い着物を被^きていたよ。而して頭から何か被^きっていたよ。」

「而して、その黒い坊さんはどうしたい。」

「僕は、その坊さんに石を投^なげてやった。」

「何か物を言^いつたかい。」

「何処かへ消^きえてしまつた。」

「何、それは幽霊でないよ、誰か、杉の枯枝を拾^{ひろ}いに來^きていたのだよ。君、幽霊なんかこの世界にありはしないよ。」

「うん、ありはしない。学校の先生が幽霊などありはしないといつたよ。」と一人が傍^{そば}から賛成した。

皆んなは、これで黙ってしまった。それから、またわいわい言っていたが、

「隠れんぼうをしよう。」

と、一人が言った。

「しよう。」と、其処にいたものは、皆んな同意した。而して、また、石の転っている空地に輪を造って、りやんけんぽと言つて、拳に敗けたものは鬼になつた。

その時、臆病の正一はこういつた。

「君、隠れる場処ばしよをきめて置こうよ。」

すると、皆んなは、もう遅くて、暗くなつたから、彼方の桑くわば圍たけへは行かないことにしよう、この家敷の周圍まわりだけにしよう

いった。

「じゃ、あの杉の木の森……。」と正一は言った。

「何、森がなくちや隠れる場処はありやしないじゃないか。」
と、一人が打消した。

三

やはり正一は、鬼にならなかつた。皆んなは、固^{かたま}つて逃げて森のところまで来た。鬼は、やはり眼隠しをさせられて、空地の、石の転っている処に彼方向きになつて立っていた。

皆んなは、杉の森のところまで来ると、

「オイ、固つて隠れては駄目だ。直すぐに分つてしまふから、皆んな分れて隠れようよ。」

と、一人が発議した。皆なは、「そうだ。皆んな別々に隠れよう。」といつて各自はこそこそと森の中の、藪の中に、それぞれ隠れてしまった。

もう、夕靄が一面に下りて、森の下は暗くなつて、少しも見えなかつた。紅い夕日は、僅わずかにほんのりと遠くの地平線に余炎よえんを残していた。黒く人のように立っているものがある。それは、木の枝が固つているのであつた。正一は、自分独りになつてまごまごと隠れるところを探していた。

先刻、幽霊の話聞いたので、日頃から臆病であつたから、独

りで隠れる気にはなれなかった。

正一は、こう思った——もし、自分が鬼になれや黙って帰れない、若しも鬼になって、黙って家に帰ると明る日あく、皆んなからいじめられるから、鬼にならないうちに家に逃げて帰ろうかとも思った。しかし、今から、家に帰ろうとしても、鬼に見付けられてしまふだろう……こう考えながら、森の中をうろうろしていた。大きな、黒い杉の木の幹には、青い苔の生えているのが白くなつて見えた。また、女の頭かみのけ髪かみの乱れたような蔦つたなどが下つているところもあつた。赤い、烏からすうり瓜うりの吊下つているところもあつた。何だか、黒い、暗い頭の上から、誰か覗あいているような気がして、独りで、藪の中に竦おそんでいることが出来なかった。

このとき、鬼は、

「もういいか。」

と、叫んだ。その方を振向くと、夕靄の中に立って、眼を隠している友の姿がぼんやりとして見えた。

「ま——だ——だよ。」

と、一生懸命で正一は、せつなそうな声を出して叫んだ。

すると、彼方の黒くなつた藪の蔭から、

「何しているんだ。早く隠れれよ。」

という声があった。

正一の気は、焦立^{あせ}つて、こうしていることが出来なくなつた。

彼は、まごまごしてうろついている訳には行かなくなつたので、

自分独り、何処か他にいい処はないかと四辺あたりを見廻して、森から他の場処を探した。

何処を見ても、眼を遮るようなものがなくて、ただ、この癢れくさ果てた空屋敷の跡には夕靄がぼんやりと白くかかっているばかりであつた。

正一は、仕方なしに地面の上に臥ねている訳にも行かないような気がして、気の急いでいる刹那に、ふと空井戸のあることに気がついて、早速其処に走つた。

四

空井戸の中を覗くと、真暗まつくらであつた。けれど、彼は、その井戸はいつかいろいろのもので埋つていて、其様そんなに深くないことを知つていた。

中には、水がなかつたけれど、落葉が溜つてきて、湿気ばんでいた。而して井戸の周囲には、苔が生えて、夜の靄は、この中から浮き上るように天上の方はぼんやりと霞んでいる。

落葉の匂いが、冷ひややかに鼻に浸みた。正一は眼を上の方に向けていると円い穴は、直に青い空を円く限つている。ちやうど井戸の上は、青い空に掩おおわれているように、他に何も見えなかつた。

眼を上に向けて、もしや、鬼が来て、この中を覗きはしないかと仰いでいたけれど、誰も来て覗いて見るものもなかつた。

その内に、ちらちらと星の輝くのが見え始めて来た。彼は、たとえ誰が来て、上から下を覗いても、中は真暗で見えないから見つかる気遣いはないと思つていた。

彼は、耳を澄していたけれど、何の声も聞えなかった。もう、今頃は、誰かが見付かつた時分であろうと思つたが、皆んなの叫わめく声も聞えなかつた。彼は、尚なお声を潜ひそめて、黙つて、若しや鬼がこの上の辺りを通つていのではないかと思つていた。

空の色は、ますます青く冴えて、星の光りがはつきりと澄み渡つて来た。

彼は、何となく心細くなつたので、

「もう、いいぞ。」

と、井戸の内から叫いた。

その声は、穴の周囲に突き当って、上の方へは聞えなかったよ
うだ。彼は、こう叫ぶと誰か来て覗きはしないかと、胸をどきど
きさして竦んでいた。

自然に崩れて落ちる土の塊りが、ころころと転げて来て枯れ葉
の上に落ちた。彼は、出て上を覗いて見ようと思った。

正一は、足を井戸の周囲に踏みかけた。けれど手に掴まる処が
なかったので、容易に上ることが出来なかった。彼は、爪で、土
を崩した。而して、其処に足をかけて、やっと片手を穴の上にか
けることが出来た。

こんなことをする間にも、時間は余程たって、彼は、幾たびか

上りかけては、下に落ちて穴の中で、尻餅を搗いた。而して、や
つと土に塗まみれて、井戸の上に出て見ると、もう、誰も、空地に
は居おらなかつた。

四辺は、眠つたようにしんとして、彼は、言うにいわれない頼
りない悲しい感じがした。まだ四つか五つの時分、母が使つかにでも
行つて居なくなつた時分がふらふらと浮んだ。ちようどその時の
ような怨うらめしい、やるせない思いがした。心のうちで何い時の間に
皆んなは歸つてしまつたのだらうと怪しまれた。見渡す限り、白
い夕靄がかかつている。その中に、黒い森が、ぼんやりと浮き出
ている。彼方の圃はたけには、ひよろひよるとした枯かれた木が立っていた。

正一は、まだ誰か、その辺に残つて居りはせぬかと、彼方、此

方見廻しているうちに、誰か一人、十五六歩も隔って、白い靄の中にしょうぜん悄然として佇たたずんでいるものがあつた。

「オイ、誰だい君は。」

と、正一は呼びかけて、その方に歩いて行つた。

五

月が森から上つた。

あたりは、急に明るくなつた。

「オイ、君は、誰だい。」といつて、正一は、立っている人の傍に寄つて、顔を覗いた。

頭から、黒い布を被^ぎつてゐる人は、黙つていた。正一は、びつくりした。けれど、誰かこんな真似をして、みんなは隠れて、自分をおびやかそうとしてゐるのではないかと思つたから、

「オイ、君は誰だい。」

といつて、その黒い人の前に立つた。

けれど、その人は、やはり黙つていて返事がなかつた。而して、あたりは余り静かで、しんとしてゐるのでなんだか身に寒氣を覚えて、変な氣がして来た。

この時、立つてゐる人は、始めて頭から黒い布をはずしたのである。

月の光りに見ると、白髪^{しらが}の坊さんであつた。やはり身に鼠色の

きもの
衣物を被っていた。

正一は、一目見て、この坊さんは、或時、何処かで見たことのあるような、微かな記憶が不思議に浮ぶような気がしてならなかった。坊さんは、

「わしの顔を覚えていないか。」

といった。すると急に正一の頭は、はつきりとなつて、いろいろの過去のことを考え出された。

「去年の、春の日であつたが、お前を見たことがある。」
と、坊さんは言った。

正一には、すべてがはつきりと分つた。ちょうど桜の花の咲く頃の事であつた。あの日の晩方、家の前に立っていると、あちら

から、一人の旅僧が歩いて来た。その日は、朝のうちから、曇つて、一日花曇りに日は暮れてしまうような穏かな日で、遠くでは、寺の鐘がゆるやかに鳴つて聞えた。正一は、死んだ祖母のことなどを思い出していると、一人、草鞋わらじを穿はいて、びしゃびしゃと歩いて来た旅僧は、家の前を通り過る時に、ふと、自分の顔を見てにっこりと笑つた。白髪あの皺かの寄つた顔お貌かが、何んだか死んだお婆あさんに遇あつた時のように懐かしく思おわれた。正一は黙つて、そう思おいながら、不思議かそうな顔お付つきをして、旅僧の顔を仰いで見ると、

「大きくなつた。また来るよ。」といつて、その旅僧は行つてしまつた。正一は、家に入つて、そのことを母親に話すと、人違い

だろう……お前に、そんなことをいう筈はない……あまり、可愛らしいから、そういつたまでだろう……これから、知らぬ人が、いい児だから私と一しよにお出でなどといっても行つてはいけないといった。

今、自分の前に立っている坊さんは、その時の坊さんであった。

「覚えている。」

と、正一は心の裡うちで言つた。

星の光りは、秋の冷たい空気の中に染にじんで、鼠色の衣物を着た、坊さんの眼は水晶のように光つて見えた。

「わしは、お前を見ようと思つて来た。」

と、その坊さんは言つた。正一は母の言葉を思い出していつしよ

に行つてはいけなかつた。帰る時、坊さんは、正一を家の近くまで送つて来てくれた。

正一は、病氣にかかつて床についていた。今、夢から醒さまされた。眼を開けると、母親や、親類の人々が心配そうな顔付をして自分の顔を見ながら枕許に坐つていた。

——春の晩方くれがた、桜の咲いている寺へお詣りに来た。沢山の人がお詣りに来ている。中には、もうこの世を去つた人で、見覚えのある老婆もあつた。自分は、死んだ祖母に手を引かれて堂に上ると彼方に、蠟燭ろうそくの火が揺ゆいでいる。其処の一段高い、天蓋てんがいの下には、赤い袈裟けさをかけた坊さんが立つていた。あまり、人々の

念仏の声などが、鐘の音など入り混っっていて、坊さんの言っていることが分らなかつた。

その坊さんは、なんだか見覚えのあるような気がしてならなかつた――。

医者が来て帰つた。その診察によると、もう、正一は、二たびかくれんぼうをすることが出来なかつた。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑
摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「定本 小川未明小説全集」小説集※「#ローマ
数字1、1-13-21」講談社

1979（昭和54）年4月6日第1刷発行

初出：「朱戀」

1912（明治45）年1月号

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2015年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

過ぎた春の記憶

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>